

# 國語と英語の受動態の比較

一七

速 川 浩

## 序 説

- 一 國語受動態の消極面
- 二 英語で受動態の望ましい場合
- 三 受動態の代用となる國語の表現法
- 四 國語受動態の積極面

## 序 説

國語が英語その他印歐系國語に比し受動態の範圍も制限せられ頻度も低い事は夙に比較言語學者の注目を惹いた特徴であり、この特徴は國語が如何なる語族に所屬するかを決定する重大な判斷材料とさへなつて居る。たとへばアストンは日鮮兩國語は「共に動詞の人稱が缺けて居る爲に受身が發達して居ない」事を以て兩者同系論の一論據となし、又その逆にチェムバレンはアイヌ語には印歐語の如き受動態が存在して居るが國語にはそれが缺除して居る事實を以て兩者は別系統の語であると斷ずる一傍證として居る。今實際に國語と英語の受動態の頻度の差を實例を以て説明する爲に和泉式部日記卷頭約十二頁の原作と大森女史による同箇所

の英譯とを比較して見るに原作にはその間唯一回の所謂自然勢があるのみなるに對し翻譯には實に前後三十七回の受動態が現れる。同じ内容を表現するには一對三十七と言ふ甚だしい差が生ずるのは一體兩國語の如何なる差に依る物であらうか。一方が不必要とする物が他方では何故に不可欠なのであらうか。之等の點を以下審かに検討し兩國語の互の特徴を説明する一助としたい。

## 一 國語受動態の消極面

一般に國語の受動態は人格的被動に限られて居る點英語と異なる。人格的被動とは一、利害を感ずる能力ある人格が二、或動作により被害迷惑（時には恩恵）等の利害を受ける意味である。従つて次の英語の例の如く物を主語とする受動態は近來の翻譯的國文以外には國語では用ひられない。

Sunday is followed by Monday.

The bed had not been slept in.

更に人を主語としても

I was joined by a fellow passenger.

He was interviewed by a girl.

の如き英文を「相容に仲間入りされた」「一少女に面接された」の如き國語に修す事は迷惑の語感が強く原意を失ふに到る。此の二點で國語の受動態は既に非常な制限を受けて居るのである。但し物が主體の受動態も次の場合には國語でも普通に行はれる。第一は物を擬人化した場合で川柳等に良くある

飛鳥山 毛蟲になつて見限ぎられ

あぶられて 五臓をしぼる 古きせる

の如きは之である。第二は物の動作でなく状態を言ふ時である。即ち「彼の家はライト氏により建てられた」と動作を主體とする場合は國語では言はないが、反之、「彼の家は耐震的に建てられて居る」と状態を示す場合は國語でも許容される。この状態を示す場合と動作を示す場合との受動態には異つた二面のある事はカームは動的及び靜的受動態なる名稱で、エスペルセンは生成及び存在受動態なる名稱で説明して居る、獨乙語ではそれ／＼ werden と sein により兩者を辨別して居る。

## 二 英語で受動態が望ましい場合

國語の今一つの顯著な特性である主語を顯在させない特徴は受動態の發達せぬ事實と密接な因果關係を持つて居る。エスペルセンは英語で受動態が望ましい場合として次の五例をあげて居る。

- (一) 主語が不明又は表はし難い場合。
- (二) 主語が自明で言ふ必要のない場合。
- (三) 遠慮氣兼ねため主語を言はぬ場合。
- (四) 受動態にすれば文の主語を取りかへないですむ場合。
- (五) 動作の主語よりもそれを受けた物の動作狀況が問題となる場合。

以上のいづれの場合も國語では能動態で言ふのが寧ろ常態であるがその多くは國語の主語潜在の性質で説明される。

(一)の主語が不明又は表はし難い場合とはたとへば

The doctor was sent for.

The map hung on the wall.

This picture is very well painted.

等の如きでいづれも能動的主語が不明である。他の印歐語、獨乙語、佛語等にはかかる場合廣い意味を持つ Man, on 等がある爲

Man hat viel über diesen.

*On en a parler assez.*

の如く言ひ得るが英語には之に當る物がない爲勢ひ受動態に依らざるを得なくなる。然るに國語では主語を常態でも省略する位であるからかゝる不明の主語に當然何等の考慮を拂ふ要はなく「醫者を呼んだ」「壁に掛けた地圖」「この繪は良く描いてある」の如く極めて自然に能動態で表現し得る。

(二)の主語が自明で言ふ必要のない場合とは

*English is spoken in Canada.*

*He was elected M. P.*

の如き物で英語では之を能動態で言ふ爲には

*They speak English in Canada.*

*People elected him M. P.*

の様に何等かの形式上の主語を使用せねばならぬが國語では同様の理由に依り簡単に「カナダでは英語を話す」「彼を議員に選舉した」と主語も要らず受動態にする必要もない。

(三)の遠慮氣兼ねのため主語を言はぬ場合とは良く論文や講演に見られる型で自己を脊後にかくして自己一箇の判斷でなく客觀的事實である様な含みを持つ文體である。

*It may safely be said ~*

*As have been mentioned before ~*

の如きはこの例である。この様な自己踏晦的な文體に對し近頃は論文でも親炙的對話的な文體も現れた。前者の代表としてエスペルセンの *Essential of English Grammar* (十二章受動型) 後者の代表としてリードの *Prose*

Style (序言二頁十九行まで) の略々同じ長さの英文を比較してその間に用ひられた人稱代名詞を數へて見ると  
 エスペルセン 4 リード 28 であり前者は自己踏晦的である事がわかる。殊に四回の代名詞も一人稱單數を  
 用ひず復數型 We を用ひて共同責任の様な口吻である。一方この間に現れる動詞の態を比較して見ると

	エスペルセン		リード	
	エスペルセン	リード	エスペルセン	リード
一、受動態	28	8		
二、能動態	14	30		
三、過去分詞	6	1		
四、現在分詞	5	3		
五、自動詞	5	10		
計	58	52		

總計の動詞は略々同數であるが今受動的である過去分詞と一を加へた物を受動要素として能動的な現在分詞と  
 二を加へた物を能動要素とすると

	エスペルセン		リード	
	エスペルセン	リード	エスペルセン	リード
受動要素	34	9	64%	21%
能動要素	19	33	36%	79%

となりエスペルセンはリードに比し斷然受動態を多く用ひて居る事がわかる。之表は英語では無人稱的文體を好  
 めば必然的に物を主體と爲す事となり、ひいて受動態を用ひねばなくなる關係を明瞭に説明して居る。然る  
 に國語では前例の様な時も「かう申しても過言ではありませんまい」「前回申述べた如く」の様に自己を踏晦しつ

い、さりとて又物を主格とせぬ對話的な表現が許される。

以上三つの場合共いづれも能動の主語が明示されぬ場合でエスペルセンは英語の受動態七〇%から九四%まではこの種であると言つて居るのを見れば英語に如何にかゝる受動態が多いかわかり、その様な場合國語では今説明した様に普通能動的に表現する事を思へば兩國語間の受動態の頻度の差の原因が那邊にあるかわかる。又これらの英語の能動文の主語は受動態では省略し得る程度の意味の重要性しかなく、能動態で存在して居るのは意味上の要求でなく文法上の手段であるに過ぎない。國語ではかゝる意義上重要でない要素は容易に省略して了ふ。主格省略の國文が外國人の心配する程意義の混迷を示さない事はこの點からも説明し得る。

(四)の受動態にすれば主語を取替へないですむ場合とは

*She came to the Derby, not only to see, but also to be seen.*

の様な例で之は *to be seen* は *for others to see* とするより主語が一貫し簡潔である點優れて居ると言ふのである。かゝる場合も國語では容易に解決して居る。

煩惱の犬は追へども去らず、

昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は作り、(方丈記)

之等は英文法的には「煩惱の犬は追はるとも去らず」「去年破れて今年は作られ」と言ふ方が論理的なのであらうが國語では無難作に上記の様に言ふ。國語の(殊に古典の)英譯にはかゝる折一方を受動態にせねばならぬ例が多い。又古典の現代口語譯にも次の谷崎源氏の例はそれである。

中將はかく言ふにつけてもげにあやまりたる事と思へば(御幸、原文)

中將はさう仰しやられて見れば全く自分の失錯であつたとお感じになつて(谷崎譯)

原文のかく言ふ者は近江の君であるがそれを態々引出すのも煩しく、さりとて現代人には既に原文は若干難解になつて居るので譯文の様に受動態を用ひるより外はなかつたのである。

(五)の動作の主語よりもそれを受けた物の動作状態が問題となる場合

a. A beat B. 甲、乙を打ち。

b. B was beaten by A. 甲、乙に打たれ。

この二文は同一の内容を態を變へて言つたと一般には言ふが嚴密に言ふと次の點で異つて居る。一、重點が異なる。前者は加害者に後者は被害者が問題。二、意志の有無、前者は故意、後者は必ずしも不然。三、受動態では動作の経路より結果が重んぜられて居る。故にこの様な時には英語では受動態が望ましいと言ふのである。然し國語では乙を甲より重視し乙を文頭に引出し顯位を與へながら猶かつ受動態に據らず「乙は甲が打つた」と言ひ得る。之は前記四例の様に主語潜在の特徴によるとは別な説明を以てせねばならぬが國語ではかゝる文頭提示語として強調する型はごく普通に見られる所である。

### 三 受動態の代用となる國語の表現法

前章に於て英語で受動態が望ましい場合も國語の特性が能動態で言ひ切る事を可能ならしめる諸例をあげたが國語にはこの外にも色々の特種な表現があり受動態の代用を爲して居る。本章ではそれらの種々の表現法を考へて見たい。

#### 一、敬語法

先づ考へられるのは國語の非常に發達した敬語法である。今或動作（たとへば教へる事）がA（たとへば我）

よりB（たとへば彼）に當つて行はれた時之を表現するに如何なる手段に依るか。英語ではAを主語として言へば能動、Bを主語にして言へば受動のいづれかに依り表現する。即ち次のいづれかである。

1) I taught him.

2) He was taught by me.

然るに前述べた様に國語では一々主語を明示する方法を好まない。又二の様な受動態も發達して居ない。それではその補ひを何でつけるかと言ふとそれは動詞に或は尊敬或は謙遜を示す特種工作を講じてその動作が何所から何所へ向つて流れたか示す敬語法である。即ち前例では「お教へした」と言ふ表現で我から彼に向つて行はれた事を示すばかりでなく兩者間の尊卑親疎等の關係までも表はし得る。「教へて戴いた」「教へて貰つた」等はそれ自身完全な受動態である。國語では受動も尊敬の助動詞も共に、らる（文語）れる、られる（口語）で共通であり發生的には受動的用法が尊敬を示す様に轉用された物である。即ち貴人は自己の意志を以て行動すると言ふより天然自發の行動の如く言ふ方が敬語を示す心理から轉用されたものである。行幸するより行幸されるが敬語となる所以である。又行幸なる。御嘉納ありのなる、ありが敬語となるのも又同じ心理である。尊敬と受身との差の微妙な事は次の例を見ればわかる。

私は父に英語を教へられた（受動）

父は私に英語を教へられた（尊敬）

私を主體とすれば能動、父を主體に取れば尊敬となる。手紙文では敬語を現すに漢文の助動詞を用ひ「被下度」「被遊度」とする位兩者は渾然として居るのである。然るに現代國語では次第に敬語には受動と別の表現を用ひる事が發達し「教へて戴いた」「教へて貰つた」「お教へになつた」等の形が普通となり漸次吾々の意識から兩者



の密接な關係が薄らいで來るのではないか。學生に次の様な英語の受動態を譯させると「讀まれる年頃」「着物を着せられる」等とのみ譯し原意を失ふ。

To a child of age to read, or to be read to, any book is better than no book. (Milne)

The children were dressed every morning by their mother.

之を「人に讀んで貰ふ年頃」「母親に着せて貰つた」の様な適譯が仲々出來ないのは敬語も一種の受動態である事の認識が不足だからである。

## 二、被動的動作を意識的の如く言ふ法

いづれの國語にもこの様に自己の自由にならぬ動作を恰も自己の有意識的動作の様に言ふ方法は存在して居るが國語には殊にこの種の表現が多い。

らくだを逃がしたのではありませんか (國語讀本)

病氣で一人息子を殺した。

とげを刺した (但し「蜂に刺れた」)

あか棚に菊紅葉など折り散らしたる (徒然草)

淺黄の帷子をぞ透かしたまへる (枕草紙)

殊に英語との對照で顯著なのは喜怒哀樂等の感情を我は能動的に言ひ彼は受動的動作と見る點である。然し國語でもそれ等動詞を受ける名詞の格を見ると、に驚く、に困る、に満足する等格助詞に、を使つて居る所を見ると若干受動的な物を意識して居るのかも知れぬ。何所までを被動と感じ、何所から意識的動作であると斷ずるかは微妙な問題である。「怪我をする」「病氣をする」「死ぬ」等は國語では皆能動的に言ふが英語では怪我の方は原因

が瞬間的で歴然として居る爲であらう皆受動的に be wounded, injured, hurt の如くに言ふ。然るに病氣の方も吾々の欲せずして受けた點は怪我と同様であるが今度は受動能動兩様の表現が半ばにして居るのはそれ程原因が明確でない爲であらうか。又吾々の最も好まざる死は當然受動的に言ふ筈であるが之は英語でも皆能動的に言ふ。之は對者意識が強くなると die ではなく kill と言ふ別な範疇に入る爲であらう（但し國語の弑すは死すと關係がある）。バイイは「言語活動と生活」中にこの様な「自己の意の如くならぬ結果をしぼく心にもなく蒙る時でさへ主體が能動的であるかの如き表現は我々の如く發達せる社會の内に残る原始的心理の痕跡である。」と言つて居るが之は國語の戰記物に見られる「内胃を射さす」式の表現の説明としては不適である。國語では受動態は被害迷惑の語調が強いため己の弱味を示す様になりそれを避ける爲に故意に使役態を用ひたので寧ろ複雑な進歩した心象である。一體に英語で受動態を用ひる所を國語で使役的に言ふ例は可成り多い。「牛にひかせて善光寺参り」とは言つても「牛にひかれた車」とは言はず「牛にひかせた車」が普通であり suits made to order も「注文で作られた服」でなく「注文して作らせた服」である。戰記物以外にも金銀に餘慶なく京堺の者によい事させて……（永代藏）遙々のおもひ胸をいたましめ（奥の細道）等は強い感じを與へる。

### 三、受動代用の自動詞

國語でも英語でも他動詞の受動態と自動詞とは極めて類似しその間に明確な一線を引く事は困難である事が多し。クルーシンガは言ふ。

「元々保留目的語を有しない受動の動詞が作爲者を示す修飾語なしに用ひられる時は意味上には自動詞と同等

になる。」

従つて I am very pleased は既に受動的意識を消失し（その認據には普通過去分詞には用ひない強詞の very を用ひて居る）I rejoice の如き自動詞と同一語感になつて居る。

殊に國語では自動詞の意義が英語よりも廣大で當然受動的の内容を持つて居る物が多い。

問題が解ける、わかる、先生に教はる、葉が風に破れる、木の葉に埋れる、恩師にさづかる、追手に捕まる、時計が見付かる、命が助かる。

ヴァカーリの ジャパニーズ・コンパセーション・ドラマ 日本語會話文法にはかゝる動詞を變則受動々詞と名付け「多くの場合英語の受動々詞は日本語の自動詞に相當する」と注意を與へて居る。

一體に國語の自動詞は他動詞語尾が「す」が多いのに對し「る」語尾が多い。裂ける―裂く、刺さる―刺す、餘る―餘す。生きる―生かす。蒸れる―蒸らす、生える―生やす、眠る―眠かす。之等の事實から判斷して自動詞は受身の助動詞る、らると關係あり、他動詞は使役の助動詞す、さすと關係があつたのだらうと判ぜられて居る。それ程國語の自動詞は受身と密接な關係があつた物で現在自動詞扱ひをされて居る「舟が見える」「鐘がきこえる」等は萬葉等ではまだ受身の意識が明瞭であつた。

#### 四、ボイス態が不定な漢語系動詞

國語の動詞中には漢語の抽象名詞にするを付けた動詞が非常に多數を占めて居る。彼等は一、決定する、破壊する。分解する等のサ變活用物や 二、減ずる、變ずる、通ずる等のザ行上一段（或はサ變）三、化する、決す、復す等のサ行四段（或はサ變）の物まで入れると一寸改つた論文調の文章に於ては四段活用の動詞の數を凌駕する。然るに之等漢語系の動詞はどれも自他いづれにも使用出来る。たとへば決定するは他動詞の決めるにも

自動詞の決まるにもいづれにも使はれる。従つて次の様に言ふ事が出来る。

委員は計畫を決定した（決めた）他動詞

計畫が決定した（決つた）自動詞

この際若し決定するが他動詞用法に限られて居たなら「計畫が決定された」と當然受動態を用ひねばならぬ。英語では正にその通りで決定するに當る動詞 *decide, form, settle, establish* 等いづれも他動詞であり自動詞に轉用する事が出来ないので計畫を主語に出す時はいづれも受動態に據らねばならぬ。

*The plan was decided, formed, settled, established etc.*

この様に漢語系動詞は自他兩様に用ひられ又その系統の動詞が非常に多い事が國語の受動型の尠い重大な原因の一つとなる。

元來漢文では自他の別は勿論の事、名詞動詞の區別さへ無いのであるから態も又不明で文脈により判斷するより外ない事が多い。勿論於、爲、見、遭、過、被等の語を見出し語として受動態を作る事もあるが多くは文脈による。この語法を受繼いだ國語では良く新聞の見出語に見られる様な助詞や動詞語尾を省略した表現では能所が不明不定で判斷に待つより外はない。例へば「中共軍包圍」とは中共軍が包圍したのか又は包圍されたのかわからない。能所が不明なのは結局漢文の名詞的構造による物である。英語でも同様に現在受動態を用ふべき所を能動態ですまして居る諸例は殆ど發生的には名詞的構文であつた事がわかる。

## （一）、進行形

*The house is building.*

歴史的には *The house is on building* (=under construction) で我が「目下建築中」と比較される。

## (二) 不定法

This house is to let.

之も歴史的にはるは前置詞 let は名詞で for rent に匹敵する。國語の貸家と比較される。

## (三) 動名詞

The house needs repairing.

動名詞は當然名詞用法で我が修繕を要するに當る。

## (四) 抽象名詞

The love of his parents.

之は「親に對する愛」とも「親の愛」とも即ち親は愛の主體とも又目的とも解釋される。國語でもそれは養育の恩(養育された恩)養育の惱(養育する惱)の様に能所の決定は場面による。

名詞を他の名詞にその儘直續させ形容詞の役を勤めさす働きはエスペルセン等は英語の佛語に比し優れて居る機能であると述べて居る。たとへば beauty-spot (E) — grain de beauté (F) : coffee-room (E) — salle-à-manger (F) の如く佛語では前置詞を要する。

然るに國語では更にこの接着は自由で名詞は殆ど無制限に形容詞となり得る點は便利であるがその代り態の把握には注意が要る。たとへば破壊箇所は破壊された箇所であり、破壊爆彈は破壊する爆彈である。英語なら當然 destructed place と destructive bomb と言ひ分ける所である。又追放人は追放された人であり、迫害者は迫害する人である。この混迷を厭ひさりとて漢語調も捨てたくない時は被選舉人、被後見人、被除數の様な言方をする。

## 五、自然勢

自然勢とは國文法で受動と形は同じであるが自然にその様になる動作を意味する時に用ひる言葉である。筆取れば物書かる。昔の事が偲ばれる。行來が案ぜられる。

等の如き物である。發生的には受動の轉用であるが現代の意識では少し意義が異なる。又形式からも現代國語では書かれるに對し書けるの言つた風に別型を持つ様になつた。英語でも自然かくなる場合と受動態とが密接な關係のある事は次のカームの言葉でもわかる。「自動詞が或事が自然的な經路發展でそれ自體起る様な事柄を述べる時に受動的な語調を帶びて來る。」又英語で前章に擧げた四つの能動態が受動態の代用となる場合の更に第五の例として能動受動態なる物がある。それは

*The book sells well. These oranges peel very easily. Which apples bake best?*

等の例であるが之等は物が所爲者自身の様に考へられ、本や蜜柑林檎の意志で自然にさうなる。従つてその様な可能性がある意義であると説明されて居るが國語でも之等は皆次の様な能動的に言ふ。

この本は良く賣れる。このみかんは樂に皮がむける。どの林檎が良く焼けるか。

然かも前にも言つた様にかゝる自然勢は受動態より轉じ今では別型賣られるに對し賣れる、むかれるに對しむけるを持つ様になつた。そして賣れる、むけるは又現代國語では可能を意味する事を思へば日英兩語共期せずして同一の心理より出でた物であり興味が深い。

## 四 國語受動態の積極面

今迄述べ來つた事は多く國語の受動態の英語に比しての消極面であつた。然し又一方國語には英語にない特殊な受動態の機能があ

る。之點を論じて本章を終へる事とする。

一 國語の受動態は主として迷惑被害を示す事は屢々述べた通りであるが、今その主格たる人格と被害との關係を考へると次の様な諸段階がある。

(イ) 直接の被害を主語が受ける——子供が犬に噛まれる。

(ロ) 直接の被害は主語の所有物が受ける——子供が犬に足を噛まれる。

(ハ) の様な受動態は英語に最も普通で殊に言ふ事もない。(ロ) の如き受動態は英語では經驗受動態と言ひ

The boy had his leg bitten by a dog.

の様に表現する。或る客觀的事實を主語の經驗としてそれとの關聯に於て叙述する方法である。この段階迄は英語でも表現出来るが國語では更に一步進んだ。

(ニ) 被動する物は主語でもなく、その附屬物でもない場合

亭主が女房に癪を起された。消防が軍隊に火事を消された。

の様な受動態がある。之は即ち直接の被動對象である癪、火事は主語の所有物でも何でも無い。唯一女房が癪を起し「軍隊が火事を消し」た事全體を主格たる亭主消防の利害關係に於て經驗したのである。かゝる複雑な表現は英語では文法上には無い。

二 更に國語では英語にない自動詞の受動態がある。

子供が犬にとびつかれた。大きな男の前に立たれた。亭主が女房に死なれた。

之等は前項の最後の説明の如く犬がとびついた、大きな男が前に立つた、女房が死んだ事實により主格たる子供(第二例は不明な場合)亭主等が迷惑を受けた事を示す物で之の表現も英語にはない表現である。尤も自動詞の受動態はラテン語、獨乙語にあり又デンマーク語にある事はエスペルセンが「文法の哲學」(The Philosophy of Grammar)で報告して居るし、泉井久之助氏の「言語學論攷」によればロシア語ジョルジア語にも見られる由であるが、之は國語の自動詞の受動態とは少し趣を異にして居る物の様である。

附記——本稿は自分の日英比較語法研究の一部を爲すものである。紙數に制限を受けた事、又かゝる雜誌の性質上、横組が許されず、英文の引用を可及的に割愛した爲、論述が精細を缺く嫌が生じた事は致し方ない。参考文献等も紙數の制限で一切擧げる事が出来なかつた。先輩學究の勞作には謹んで敬意を表する。——一九四七・八・一五——